

来日450周年 その生涯と南蛮文化の遺宝

大ザビエル展

St. Francis Xavier - His Life and Times



ヴァン・ダイク作、通称《日本の王に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル》について

木村三郎
(日本大学教授)

[I]どの画家が描いたのか……従来の研究から

今回の展覧会で展示されている通称《日本の王に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル》(fig.1, cat.no.50)は、古くから、フランドル絵画の巨匠のひとりである、ヴァン・ダイクが描いた作品とされて来た。制作した作家がだれか、という事実についての最も古い資料は、1719年に刊行されている美術館収蔵作品目録である。そこには、Don Ant. van Dyckという記述が確認されている。これ以降に刊行される美術館目録では、筆者の確認し得た範囲での資料では、19世紀半ばまでは、このヴァン・ダイク説が踏襲される。一方で、しっかりした美術館目録が作成されるのは、19世紀末の1894年まで待たなければならないが、その目録の執筆者であるフォン・フリメルは、初めて作家の認定について慎重な検討を加えている。その結果、この作品は「ヴァン・ダイクの手法に基づいた」作品とされることとなる(註1)。こうした研究史を背景にして、所蔵美術館学芸部でもやはりこの見解を支持している(註2)。しかしながら、当研究では、作家の認定に関しては、最初の目録記録者であるピュス^{ピュス}が書き残した18世紀初めの資料の信憑性と、一方で様式的な根拠から、少なくとも作品の一部はヴァン・ダイクが制作したとする立場に立ちたいと思う。制作年代は、ヴァン・ダイクがハブリに滞在し、死亡する1641年を基準に想定している(註2bis)。

[II]何が描かれているのか?

この作品では、前景にクローズ・アップされた横向きの人物ふたりが描かれていて、両者は親密そうに挨拶を交わしている。左側の人物は、聖職者用の白いアルバを着用した様子からみて、タイトルの示すようにザビエルその人のようである。彼は身をわずかにかがめ、両手を広げ、貴顕の地位にある人物に敬意を示している。一方、背景にある筋彫りのある柱の存在から類推されるように、ここは宮殿の一部であると思われる。その前にいる相手の人物は、足元に2段が確認できる階段の上に立っていて(註3)、左手を胸に右手を前に出して、訪問者と思われるザビエルを今にも抱き寄せ並々ならぬ好意を表すかのように迎えている。ふたりの背後には、左には、ザビエルとともに来たであろうヨーロッパ風の人物が3人、一方の後ろには、鎧と兜に身を包み、右手に槍を構えた兵士がひとり、その右手には、アジア風(あるいは濃い色)の肌をした供のものひとりを認めることができる。

ところで、こうした内容を描き出した画面にいるザビエルを迎える貴顕の人とはだれか。つまり、具体的な主題は何か、という問題をここで少し掘り下げて考えてみたいと思う。

今記述したばかりの作品の内容分析で、筆者はあえてザビエルの相手を特定することを避けた。しかしながら、今回の研究調査でこの



fig.1 ヴァン・ダイク《豊後大名大友宗麟に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル》(通称《日本の王に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル》) 1641年頃



fig.2 フィリップ・ハル《大祭司の前の聖ペテロと聖ヨハネ》1558年 原画:ヘームスケルク 205×250cm

作品に関する来歴資料を古いものから丹念に読んでゆくと、そこには Kaiser von Japonien という興味深い表現が、先に指摘した、1719年刊行の目録のタイトルに付与されていた事実を確認することができた(註4)。そして、このタイトルは、その後の基本的な認識となっていて、以降、今世紀の資料である研究者フィッシャーの記述に至るまでほぼ踏襲される(註5)。この表現を現代日本語にどのように邦訳するべきかは容易なことではないが、一応「日本の王」として議論を進めてみたいと考えたい。

[III] 貴顕の人物に拝謁する図像とその伝統

1. 16世紀フランドル版画との類似性

ところで、ある人物が王や貴顕の人物に拝謁するという主題は、西洋美術史の世界では珍しいものではない。たとえば、fig.2-5に示した作例はその典型的なものである。fig.2の場合は、フランドルの著名な版画家であった、フィリップ・ハルが、ヘームスケルクの原画に基づいて

1558年に描いた《大祭司の前の聖ペテロと聖ヨハネ》である。ここでは、ふたりの聖人が祭司長という高位な立場にいる人物の前に立っていて、祭司長は、階段の上にしつらえられた玉座に腰をかけ拜謁を受けている。周辺には見守る人物たちがいる註6)。

同じフィリップ・ハレの作品である《大祭司の前の聖ステパノ》(fig. 3)註7)になると、左右は逆となるが、聖人と祭司長との関係には主題内容が変化しても大きな変わりはない。玉座に座った大祭司は、やはり階段の上において、連れて来られて話かけている聖ステパノはその前に立っている。背景と周囲は前作と同じくしっかりした宮殿を思わせる建築部分である。

fig.4では、聖書外典に文学上の典拠を持つ《ホロフェルネスの前のアキオル》を描く、1564年制作の同じフィリップ・ハレの版画である。この作品は、聖人を描く図像ではない。しかし、権力をほしいままにする人物の前に立つアキオルには、やはり上述した作例の主題内容と似た人間関係を認めることができるだろう。興味深いことは、ホロフェルネスがやはり階段の上にある玉座に座っていることで、上下関係を持つ人間関係の表現はほとんど変化を見せていない。もう1点、fig.5は、やはりフランドルの版画家コルネリス・コルトが《ファラオの前のモーセとアロン》註8)を描いたものである。ここでは、画面が縦長になり、話しかけるモーセとアロンに向かって、階段上のファラオの権威が視覚上はさらに強化されているともいえよう。いずれにせよ、fig.2-5を比較検討しただけでも、フランドル画家ヴァン・ダイク(あるいは、その周辺の画家たち)が生きていた時代に十分参照し得たであろう、やはりフランドルの16世紀の版画作品では、貴顕の人物は大半が階段という高い位置にいたことが共通しているのである。

ところで、我々が問題にしているfig.1の構図の右下にも、2段の階段が描き込まれていることを再確認してみたいと思う。つまり描かれた前景の人間の間にも、やはり同じ関係が確認できるのである。この画家も、同一主題では全くないが、宗教主題のなかのどこか類似した部分を持ったテーマを描くに際し、この時代に一般的であった視覚伝統を引きずって制作を行ったことが推測できるのである。

2. 当該作品の違いと特徴

このような類似点を確認した上で、次には相違点に論点を移したいと思う。繰り返せば、fig.2-5に見られる貴顕の地位にある人物の描写方法は共通していて、階段の上にいる。しかしながら、fig.2-5の人物が玉座に座っていたのにもかかわらず、fig.1の中で「王」と指摘される右側の人物は座っていない。はっきりと立ち上がっていて、しかも、画面右隅の下部に確認できるように、左足の踵が階段の上面から離れているのである。つまり、この人物は、立ち上がって、前かがみになり、前のザビエルに向かって何らかの強い情念を抱きつつ迎えているのである。あるいは、すでに指摘した宮殿の画面右手からやってきて、この西洋からの来訪者を迎えているのではないかと筆者には思われるのである。類似主題を描く西洋の視覚伝統では珍しい、立ち上がり、わざわざ歩いて来て迎えている、という両者の関係は何を意味するのか、この問題を若干ここで掘り下げてみたいと思う。

[IV]果たして、日本人なのか?

ところで、ここで、18世紀の初めに書かれている「日本の(von Japonien)王」とは誰か、という問題に移って考えてみたいと思う。説



fig.3 フィリップ・ハレ《大祭司の前の聖ステパノ》原画：ヘームスケルク 212×275cm



fig.4 フィリップ・ハレ《ホロフェルネスの前のアキオル》原画：ヘームスケルク 205×246cm



fig.5 コルネリス・コルト《ファラオの前のモーセとアロン》原画：ツッカー 407×272cm

者、あるいはこの展覧会を御覧になった方々は、先ず、素朴に、この絵のなかのどこか「日本」とかかわりがあるのか、と思われるであろう。極めて自然な感想である。実際、この絵の中には、我々が常識的に考える日本的な人物も舞台設定も全く見あたらないからである。貴顕なる人



fig.6 ニコラ・ブッサン《聖フランシスコ・ザビエルの奇蹟(日本の鹿児島で死んだ娘を蘇らす聖フランシスコ・ザビエル)》1641年 カンヴァス・油彩 444×234cm パリ、ルーヴル美術館(7289)

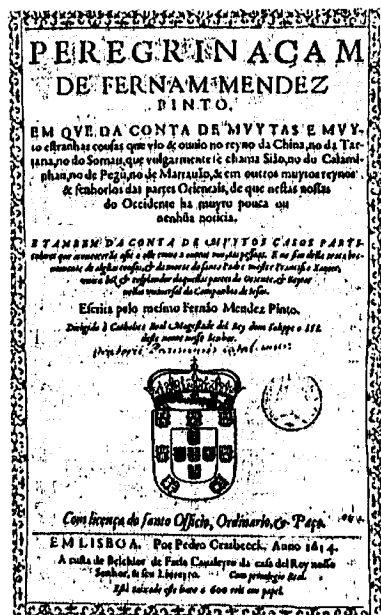


fig.7 フェルナン・メンデス・ピント『東洋遍歴記』1614年 表紙

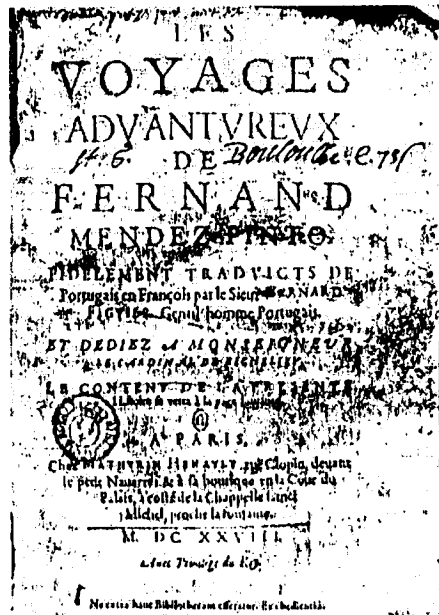


fig.8 フェルナン・メンデス・ピント『東洋遍歴記』1628年 表紙

物とはいっても、衣装は西洋風であるし、頭には冠をつけている。身ぶりもそぐわないからである。ところで、ここで参考にしたい事例は、fig.6に示した、ニコラ・ブッサンが描いた《日本の鹿児島で死んだ娘を蘇らす聖フランシスコ・ザビエル》である。このフランスの17世紀の(このfig.1の当該作品との同時代に制作したとも考えられる)画家が描いたザビエルにまつわるイメージでは、下半分の人物群の後ろに、禿頭に近い、若干東洋風の人物たちがいることは事実であるが、そこに描き込まれた女性たちは全く西洋風の衣装に身を包んでいる。ブッサンは、物語をそれらしく描くために、入念な調査研究を行うことで知られた画家であったが、彼にしても、この時代の日本についての視覚的な情報はごく限られたものしかなかったのである(註9)。こうして見ると、このfig.1を描いた画家が、あながち「西洋の王」と出会っているところではないか、と反論しにくくなるはずである。インドと日本とが、同じ東洋という枠のなかで想像されていた時代からすれば、fig.1の右上上の背景に見られる兵士に認められる濃い肌の色をした人物も、東洋の人物という程度の認識で描き込んだのではなかったであろうか。

[V]メンデス・ピント著「東洋遍歴記」に描かれた、ザビエルの日本での布教

ザビエルがわが国に来て布教を行ったという事実は、16世紀後半以降ヨーロッパでも広く伝わった。特に、1552年にコーチンで書かれたその書簡は、ローマに到着し、その後さまざまな方法で書き写され、やがてラテン語として出版された。その伝記(註10)も多数刊行された。

一方で、ザビエルの英雄的な布教活動は、極東における未知の国での体験談としてもまことに興味深く、この時代の東洋における冒険小説のなかにも収録されることとなる。1614年にポルトガルのリスボンで刊行されるフェルナン・メンデス・ピントの著した「東洋遍歴記」がそれである(fig.7) 註11)。1509-12年頃に生まれたピントは、マラッカを拠点に、スマトラ、シナ、日本などの間を何度となく往復し巨万の富を築く。51年、3度目の日本訪問で布教中のザビエルと親交を結んだ。ところが、

その富を捨ててイエズス会に入会。インド副王使節として、イエズス会士とともに日本の豊後をおとずれる。まもなく還俗して帰国した。その後、リスボン近くでこの小説を執筆し1583年に没した(註12)。

この図書の表紙に確認できるタイトルの副題にもあるように、巻末にはザビエルのいくつかの事績と死についても述べられている。一方で、この興味津津たる冒険小説は、ヨーロッパの人々の強い関心を引いた。その結果、たとえば、1628年(fig.8)と1645年にはフランス語に、1652年にはオランダ語、1653年には英語というように、各国語に翻訳されることとなる(註13)。

3. 豊後に関する章の重要性

a. ピントとザビエルの出会い

史実との照合論は別に置くとして、この小説の第200章以下に描かれた、ピントとザビエルとの出会いを簡単に要約してみよう。日本を訪れたピントは、ジョルジュ・アルヴァレスとともに豊後の府中に行くものの、暴動が生じ王が殺害されるなど、国中騒然となったため、鹿児島湾内の山川に移る。山川湾出帆に際し、追手に追われたふたりの日本人……アンジローとその連れ……を保護し、マラッカに連れて行き、フランシスコ・ザビエルに引きあわせる。ザビエルはアンジローを手引きにして日本にキリスト教を広める決意をし、シナ人のジャンク船でマラッカを発ち、1549年8月15日に鹿児島に着く。1年後に平戸に移り、さらに時の天皇に謁見するため都にのぼったが、目的を達し得ず、山口に行き3千人を改宗させる。そして、豊後にポルトガル船の入港したことを知って、豊後に移りその大名を訪問する(註14)。

b. 宗麟への拝謁の場面

ところで、最も基本となる、ザビエルと時の豊後の戦国領主であった大友宗麟との出会いは、ザビエル自身の書簡のなかに確認できる。ただそれは、極めて簡単な記述だけである。

「領主は私をたいそう歓待した」

とだけ記されているからである(註15)。

こうした事実も、ピントの手なると以下のように記述されることとなる。
1628年のフランス語版を基本に邦訳を試みた。

「第210章

最初の謁見の際に、豊後大名が、ザビエル師に示した敬意について……ここから別の部屋に入ると、そこにはこの国の重臣たちが多くいて、彼らもまたザビエルに大きな敬意を払った。そして、彼はここにちょっと立ち止まって、領主の弟と話をした。すると、奥の別の部屋から入るようにと行って来たので(p.1088)、お供をしていた領主たちの大部分とともにすぐに入ると、豪華な部屋に出た。そこには領主がすでにいて、立ち上がって待ち受けていたが、彼を見ると、先に座っていた場所から5、6歩踏み出してきて彼を迎えた(A)。神父は、領主の足下に身を屈め挨拶をしようとしたが、領主は決してそうはさせず、むしろ彼をたちあがらせ、前に述べたように深い敬意を示す挨拶を3度、彼に対して行った。そこに居合わせた重臣たちは、誰もみな大変驚き、私たちはなおいっそう驚いた(B)。そして領主が神父の手を取ると、そこまで彼を案内してきた弟君はちょっと後ろにさがった。領主は玉座(C)に座った。神父はその横に、そして、居並ぶポルトガル人たちも重臣のそばに座らせた。……(p.1089) (下線部著者) 註16)。

この比較からだけでも、ザビエルの書簡から伝わる印象とは違って、ピントの筆がいかにも豊かな描写を行ったかが理解されよう。しかし、ここで詳しく分析したいことは、この一節に著された内容と、fig.1の描き出しているイメージとの関連である。まず、下線部Aに示した部分に注意していただきたい。すでに、16世紀のフランドル版画との比較で確認したように、一種の拝調図であるfig.1の際だった特徴は、貴顕の人物が立ち上がっていて、しかも左足の踵が上がっているように、右手から歩いて来た様子が確認できたことである。これが、ピントの一節とfig.1とが符号するのではないと思われる論点の第一である。次に、やはりすでに指摘したザビエルが挨拶する人物が、腰を屈め左手を胸に右手を前に出す仕草が、やはりこのBの下線部の挨拶に対応しないであろうか、という点も興味深い。この人物の示すこうした動作は、ピントの著作のこの章のタイトル「最初の謁見の際に、豊後大名が、ザビエル師に示した敬意」そのものではないだろうか(註17)。さらに、fig.1の右下に確認された「階段」が何を表しているのか、と考えると、まず、背景に版画で見た図像伝統があったことは前提である。それだけでなく、やはり、この一節の(C)に述べられているように、この作品を描いた画家は、玉座の存在をおそらく右手の方に意識していたのではないかと考えることもできるであろう。

c. 史実とのずれと逆の意味での話の面白さ

このように引用したピントのテキストは、17世紀のフランス語版においても、ザビエルと豊後の大名との出会いを、数章にわたって詳述している。展開する話のディテールも生彩に富み読む者をあきさせない。それ故にこそ、歴史家からまことには評判が悪いのである。見てきたことのように講釈をするこの話には、事実と照らし合わせると眉唾に思われることも多々あるといつてよい(註18)。それは、わずかに引用したこの一節にも感じられるものである。ということは逆に、仮に、フランドルのこの時代の画家がイエズス会からテキストを渡されて、このシーンを描くようにとい



fig.9 マスエル・エンリケス《日本の大名に説教する聖フランシスコ・ザビエル》(通称大内義隆に拝調するザビエル)



Magno apparatu à Rege Bungo exceptus Xav. quem donat à B. Virginis scote ad conversionem disponit.
Mit großen ehren gebracht wurde Xaverius vom König in Bungo empfangen; den er durch ein Mutter Gottes bild zum Catholischen glauben bekehrt.

fig.10 作者不詳《豊後領主に歓迎されるザビエル》版画



Costoro replicato disparte co' più anonati Dottori dell' idolatria alla presenza del Re di Bungo con i signori della corte

fig.11 ピエトロ・フォンターナ(1762-1837)《豊後領主とザビエル》版画

う依頼を受け、その出来事を視覚化しようと思ったならば、正確な史実よりも断然参考になったものであろう。

d. 天皇ではないか、あるいは、他の戦国大名ではないか？

ところで、結論を急ぐ前に若干検討を要する問題が残っている。先ず、fig.1の作品について、1719年に書かれた記録にあるドイツ語のKaiserという語の意味するところである。現代のドイツ語では、現代日本語の「皇帝」、あるいは「天皇」という語を連想しがちであろう。しかしながら、この資料が書かれた18世紀初頭では、極東の島国の歴史について正確な情報が得られたとは考えにくい。恐らく、ドイツのこの時代の政治事情からの類推で、Königの上の位置にいて、それを統括する立場の人間をさしているのではないかと想像される(註19)。

次に、ザビエルが会った領主は宗麟だけでない、という事実をどのように説明するか、という問題が残る。ザビエルの書簡からは、鹿兒島到着(註20)の後で平戸に向かい、そこでは「……領主が私達をたいそう歓迎してくれ」(註21)のために2カ月滞在した事実がある。その後、ザビエルの滞在時期に実現した戦国の領主との会見の中でやはり重要性を持つのが、大内義隆との会見であろう(註22)。たしかに、fig.9(cat.no.49)に示した作品が一説には(大内義隆に拝謁するザビエル)(註23)と考えられているように、fig.1も、大内義隆との会見ではないか、と考える条件が残るといえよう。しかしながら、わざわざ立ち上がって、熱烈歓迎の意思を示したfig.1のイメージを合理的に説明してくれる松浦関係資料や、大内関連資料は目下の調査では入手し得ていないのが現状である。

e. 豊後大名との拝謁を描く関連版画の存在

ちなみに、ザビエルと大友宗麟との出会いは、fig.10に示した制作年代は不明な版画にも描かれている。ここにはやはり、作品の下に書かれた記録が示すようにカトリック信仰を伝えるために、やはり伝統的な階段の上に座った姿の豊後領主(König von Bungo)に聖母マリアを示しているザビエルが描かれ、領主から歓迎を受けていると説明をつけ加えている(註24)。周囲、あるいは背後には、インドと日本が混在したような人物群が確認される。さらにもう1点、fig.11では、18世紀末から19世紀初頭にかけてイタリアで制作されたと思われる版画で、ここには、カトリック信仰を伝えるために豊後領主(Re di Bungo)の前で、十字架を示しながら、教えを述べ伝えているザビエルが描かれている。領主はやはり階段の上の玉座に座り、首に手をやって考えにふけているところが描かれている(註25)。

いずれにせよ、宗麟が受洗しわが国における初期のキリシタン大名のひとりとなった事実は、ヨーロッパにも伝えられていて、他の戦国大名よりもその存在が大きな意味を持って理解されたであろうことは想像にかたくない。特に後者は、fig.1よりも後代の作品であるが、これらの版画は、当該作品の解釈をめざす上での間接証拠としては位置づけることができるであろう。

[VI] 結論

以上の考察から考えると、ヴァイセンシュタイン城所蔵のザビエルを描く当該作品は、ザビエルを歓迎する大友宗麟を描いたものと想定することができるであろう。従って、正確なタイトルとしては、《豊後大名大友宗麟に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル》とするべきであろう。

註

1) 現在入手し得た関連文献は以下のとおりである。はじめから数えて7点の文献に関しては、Schloss Weissenstein der Graf von Schönborn所属の、Dorothee FELDMANN, M.A.の御好意によって、入手することができた。深謝したい。

1719 BYSS (J.R.), *Virtrefflicher Gemäld und Bilder-Schatz*, Bamberg, G. Kurb., no.81., H. 6'6" Br.4'9". Don Ant. van Dyck (これ以降、寸法と作家の認定については、以下の、1857年の記録まで変化はない)。

1746 *Beschreibung des Virtrefflichen Gemöhld und Bilder-Schatzes*, Wirtzburg, M.A.Engman, no.49.

1774 *Verrzeichniß der Schildereyen in der Gallerie*, J.C.Posch, no.31, p.13.

1857 *Katalog der gräflich von Schöborn'schen Bilder-Gallerie zu Pommersfelden*, Würtzburg Thein, no.588.

1867 *Galerie de Pommersfelden, catalogue de la collection de tableaux anciens*, Paris, J.Claye, no.169, p.69. T.H., I, m.95. — L.1, m.37. Dyck (Anton van).

1894 VON FRIMMEL (T.), *Verzeichnis der Gemälde in gräflich Schönborn-Wiesentheid'schem Besitze*, Pommersfelden, zusammengestellt von Dr.T. von R., In der Art des Antoni van Dyck, no.165, p.68(作家名については、次の資料でも同じ。しかし、この文献では、エラスムス・クレスの画家名も指摘されている)。

(After)1923 FISCHER(H.), *Gemäldeverzeichnis*, no.327(165).

1980 LARSEN(E.), *L'opera completa di Van Dyck 1613-1626*, Rizzoli, t.II, no.A80, p.132, reprod.

1988 LARSEN(E.), *The Paintings of Anthony Van Dyck*, Luca, p.459, no.A151, reprod.

2) 1986年9月3日付け美術館の内部資料に従う。なお、この文書には、Voss教授による鑑定が行われた。作品の質の高さが確認され、作家はクレスではないという意見があったことが伝えられている。

一方で、近年のヴァン・ダイク研究者であるラルセンは、1980年に刊行したカタログ・レゾネ(前掲書)の中で、この画家の作品全体に分析を加えている。その結果、かつてヴァン・ダイクに認定はされていたこの作品も不確かなものとされ、新たに、この巨匠のアトリエで制作し、時折、近い作風を示しているテオドール・ボーイアーマンズTh. Boeyermansの名前を挙げている。しかしながら、この画家についての近年の信憑性の高い研究文献の中では、このラルセンの見解は採用されていない。従って、この見解は根拠の不明確なラルセンの個人的なものとして考えておきたい。

2bis) 作家の認定と制作年代に関しては、別稿で論じる予定である。

3) 宮殿の中にある階段の上で歓迎しているという事実は、1857年の目録の作品記述で指摘されている。"Der hl. Franciscus Xaverius wird vom Könige von Japan im könlgl. Ornate auf den Stufen seines Palastes empfangen." (1857, op.cit., no.588).

4) 1719, op.cit., no.81: "Der h. Franc. Xaverius bei dem Kaiser von Japonien mit verschiedenen ganzen Figuren." ところで、このJaponienの語については、その後の1774年の目録(op.cit., no.31)では、"Der Heil. Franciscus Xaverius bei dem Kaiser von Japon"と書き換えられており、従ってここでは「日本の」という訳語を与えた。

ちなみに、若干刊行年は下がるが、ほぼ同時代に近い1735年に刊行されている、18世紀前半のドイツの代表的な百科事典であるZEDLER (J.H.), *Grosses vollständiges UNIVERSAL LEXIKON*, t.XIV, 1735, p.224によれば、日本の事項に関しては、Iapan oder Japonという表記が与えられている。

また語尾が異なる、Japonienという表記に関しては、一つには、日本が島国であり、戦国大名が「朝貢している」という認識が、ザビエルの書簡に確認できる事実に参考なると思われる。(SCHURHAMMER S.J. (G.) et WICKI S.J. (J.), *Epistolae S.Francisci Xaverii...*, Coll. Monumenta Historica Societatis Jesus, Romae, t.67 (1945), p.254, no.2, {1550}; 邦訳では以下を参考にした。【聖フランシスコ・ザビエル全書簡】第3巻、1994、東洋文庫581、邦訳、河野純徳、書簡第96、2, p.169.

こうしたイエズス会からの現地報告を基礎にしたと想定される、ZEDLER (1735, p.224)にも、1550年までには、66 Königreichenを数えることができた、と記述されている。従って、たとえばPhilippinenという用例に近い語法として使われたのではないかと推定される(この問題に関しては、小野崎康裕川村女子短期大学助教授、並びに真田取一郎日本大学教授に御教授いただいた)。

5) しかし、近年のカタログ・レゾネ(1980, 1988 LARSEN)では欠落している。

6) ハレについては、NAGLER (G.K.), *Die Monogramisten...*, 1857-76, G.Franz, t.IV, p.887, no.2968;《使徒行伝》を描いた作品一般については、VON WURZBACH (A.), *Niederländisches Künstler-Lexikon*, t.I, p.566-567, no.11; BRYAN (M.), *Bryan's Dictionary of Painters and Engravers*, 1919 (1903-05), Bell and sons, (G.C. Williamson), t.II, p.211; DOLDERS (A.), *P.Galle*, 1987, Arabis Books, Coll. The Illustrated Bartsch, no.56;ハレ(フィリップ)【町田市立国際版画美術館収蔵品目録・海外編】1990、編集：佐川美智子、他、発行：町田市立国際版画、p.45-47, no.102;この作品については、DOLDERS, *ibid.*, 1987, p.144, no.047; 4, reprod.

7) DOLDERS, 1987, *ibid.*, p.155, no.048: 9, reprod.;佐川、他、1990, *ibid.*, no.102(11)も参照。

8) VON WURZBACH, op.cit., (1906-11) 1968, t. I, p.342, no.64. (1567) ; STRAUSS (W.L.) and SHIMURA (T.) (ed.), *Cornelis Cort*, 1986, Arabis Books, Coll. The Illustrated Bartsch, no.52, Netherlandish Artists, p.25, reprod.,

9) 拙論「ニコラ・ブッサン作『日本の鹿兒島で死んだ娘を蘇らせる聖フランシスコ・ザビエル』の典拠について」『ジボネズリー研究学会会報』第5号、1985、p.10-26、仏文による改訂版は、《La source écrite du Miracle de saint François-Xavier de Poussin》, *La Revue du Louvre et des Musées de France*, 1988, no.5-6, p.394-398.

10) *H. Torsellini e Societate Iesv. de vita F. Xaverii...*, Xaverii Epistolarum..., 1596, Romae, A.Zanetti(キリシタン文庫、Laures 221).これ以降多くの図書が指摘できる。

11) 註13参照。

12) *Dicionário de história dos descobrimentos portugueses*, 1994, Caminho, dir.de DE ALBUQUERQUE(L.), (E.A.)メンデス・ピント『東洋通歴史』邦訳、岡村多希子、東京、平凡社、1979、東洋文庫、全3巻、はしがき、p.viii参照。

13) 以下に、17世紀中葉までにヨーロッパ各国で刊行された『東洋通歴史』の中で、筆者が確認しえた若干の版を記す。著者名は、どれも基本的に、MENDES PINTO (F.)である。

1614 *PEREGRINAÇAM...* E no fim della trata breuemente de algúcoufas, & da morte do fanto Padre mestre Francisco Xauier,.....LISBOA,P.Crasbeeck (東洋文庫蔵O-2-A,49).

1628 *LES VOYAGES ADVANTVREXV.....*TRADVICTS DE Portugais en François par le Sieur B.FIGVIER...ET DEDIEZ A MONSEIGNEVR LE CARDINAL RICHELIEU...PARIS,M.IIENAVLT(東洋文庫蔵O-2-A-23),

1645 *LES VOYAGES ADVANTVREXV.....*TRADVITS DE Portugais en François par le Sieur B.FIGVIER...PARIS, A.COTINET...ET...I.ROGER(東洋文庫蔵O-2-A-24).

1652 *DE WONDERLYKE REIZEN...*, t'Amsterdam, I. Hendriksz(東洋文庫蔵O-2-A, 25).

14) 1628 *LES VOYAGES ADVANTVREXV, ibid.*, p.471-496.上記の岡村訳、1979を参考にした。

15) “Ho dunque me fez muito gasalhado...” SCHURHAMMER et WICKI, *Epistolae*, 1945, op.cit., p.271, no.36, (1550);邦訳では、書簡、前掲書、第96、36, p.195.

16) 前掲書、1628 MENDES PINTO, *LES VOYAGES ADVANTVREXV...* CHAP.CCX.

Des honneurs que le Roy de Bungo fist au Reuerend Pere Xauier à cette première entre-veüe (p.1086);

以下、p.1088, 26行。

“De cette salle nous entrasmes dans vne autre chambre, où il y auoit vn grand nombre de Seigneurs du Royaume, qui rendirent beaucoup d’honneur au Pere là il demeura debout quelque temps s’entretenant avec le frere du Roy, iusques à ce que d’vne autre chambre on s’en vinst luy dire (p.1088) qu’il entrast : ce qu’ayant faict aussitost, accompagné de la pluspart des Seigneurs, il se treuua dans vne chambre fort riche où le Roy l’attendoit debout, qui le voyant le vint recevoir à cinq ou six pas du lieu où il estoit assis.(A) Le Pere voulut incontinent se prosterner & ses pieds, mais le Roy ne le voulut iamais permettre, au contraire luy ayant aydé luy- mesme à se leuer, il luy fist par trois fois les gromenares, qui est le compliment dont l’ay parlé cy-deuant; dequoy tous les Seigneurs qui estoient là presens furent grandement estonnez, & nous le fusmes encore bien dauantages(B) : apres cela l’ayant pris par la main, le frere du Roy qui auoit là conduit le Père, se tira vn peu à l’escart, & s’assiat sur le marchepied du Throsne du Roy(C), qui voulut que le Pere fust assis à ses costez, & les Portugais prez des Seigneurs de son Royaume qui s’y treuerent.(p.1089), (下線部筆者)

17) この両者の出会いの話は著名なものひとつで、たとえば、トルセリーノ(トルセリーニ)が執筆したザビエルの伝記にも明記されている。ここでは、図1との関連で考えるべきであるから、幾つもある版の中で、やはり1608年にフランス語に翻訳された以下の図書を中心にその関連を確認したい。TVRSELINO(O.), *La vie du bien-heureux Pere Francois Xavier...*, 1608, Davay, B.Bellere(東大史料編纂所蔵、東洋文庫蔵(0-17-13,12).やはりこの書物の中の第9章には、「款待し(çoit honorablement)」、「立ち上がって(debout)迎えた」という記述が確認できるのである。

たとえば、第IX章には、以下のようなタイトルが付与されている。“CHAP.IX, Allant visiter le Roy de Bongo à son instance, il est accneitly honorablement des Portugais” (p.471-477)

第XI章では、
“CHAP.XI, Le Roy de Bongo reçoit honorablement le Pere François, en despit des Bonzies” (p.482-496).

“En fin il est conduit par Ficharondon plus auant en vne dernière salle tres-bien ornee, là où il rencontre le Roy qui l’attendoit debout.” (p.490)

この1608年の版のフランスにおけるザビエル図像への強い影響のありかたについては、以下の拙論を参照のこと。KIMURA, 1988, op.cit.; KIMURA (S.),(Saint François-Xavier prêchant aux Indiens, quelques aspects iconographiques), *Georges de La Tour ou la nuit traversée*, 1994, Serpenoise, p.133-143.トルセリーノのルーベンスへの影響については、SMITH(G.), 《Rubens' Altargemälde des hl.Ignatius von Loyola und des hl. Frans Xavier für die Jesuitenkirche in Antwerpen》, *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen in Wien*, 1969, 65 (XXIX), p.39-60.

一方で、王が示すポーズの一般的なかたちについては、SCHMITT (J.-C.), *La raison des gestes dans l'occident médiéval*, 1990, Gallimard, coll. Bibliothèque des histoires, p.229-232;シュミット(J.C.)「中世の身ぶり」みすず書房、邦訳、松村剛、1996、p.234-237.

18) RODRIGUES(J.), ロドリゲス(J.)『日本教会史(下)』岩波書店、大航海時代叢書、邦訳、池上岑夫訳、註、土井忠生他、1970(1622,1634),第3巻19章(p.490-499)、22章(p.526-536)。

19) GRIMM (J.und W.), *Deutsches Wörterbuch*, 1873, Hirzel, t.V, p.36-39.ザビエルが天皇に拝謁した事実は知られていない。京都に上って、時の後奈良天皇に拝謁することを強く望んだことは事実であるが、実際には不可能であった。

20) 鹿兒島滞在時期に、領主から款待を受けたという事実は書簡の中にはない。しかし、ピントの記録には、やはり款待されたように大げさに書かれている(岡村訳、第3巻、1980、p.164)。その意味では、鹿兒島での歓迎を描いたとする可能性も若干残るが、他に具体的に図1との関連を示す傍証はない。

21) “Dahy fomos a outra terra, domde ho senhor dela nos recebeo com muyto prazer...” SCHURHAMMER et WICKI, *Epistolae*, 1945,t.II, 96, 14(194-195); p.260.邦訳では、河野訳、1994,p.178、を参考にした。

22) *Ibid.*, 14-35, p.259-271;河野訳、p.177-205.

23) SERRÃO (V.), 《Quadros de Vida de S. Francisco Xavier》, *Oceanos*, 1992, no.12, p.56-69; MENDES PINTO, *DE Goa...*, no.3, 1992, カラー図版,p.28; MENDES PINTO (M.H.)「ポルトガルと南蛮文化展」1993, no.161, p.188, カラー図版, bibl., 邦訳、越智、本カタログcat.no.49参照。

24) 全32点の連作版画の中の第28作の作品。

25) FONTANA (Pietro)については、THIEME(U.) und BECKER(F.), *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler*, Seemann, t.XI, 1915, p.185.

当論文は、美学学会会(1998年12月5日、東京芸術大学)において口頭発表した研究に基づいている。

資料・参考文献

Materials and bibliography

◆ザビエルの書簡と伝記に関する一次資料

ここに記す16-17世紀に刊行された図書は希覓本であり、一般的にはわが国で入手することは難しい。それ故、今後の研究の展開のために、絶版の図書の場合を含めてその所蔵研究機関を記した。文部省の文献所蔵データベース NACSIS WEBCATなどで確認できるものを優先したが、誤りがある可能性もあり、その際には御指摘をいただければ幸いである。

凡例

BNF: Paris, Bibliothèque Nationale de France.

BF: Chantilly, Bibliothèque des Fontaines.

BL: London, British Library.

KB: (上智大学)キリシタン文庫

L: Laures S.J., J., *Kirishitan Bunko* 吉利支文庫 による関連番号 (主要参考文献A-I参照)

I ザビエルの書簡

刊行された書簡に関しても無数の版が知られている。ここに記すものは、その中で16-17世紀前半に刊行された、当展覧会に本質的な意味を持つものに限った。一方で欧文図書の場合は我が国でも閲覧可能なものを中心に記した。刊行年に特に配慮し、次の項目同様、項目の最初に記した。

1545

Copie d'une lettre MISSIVE ENVOIEE DES INDES, par monsieur maistre Francois xavier... BNF (Mf).

1545

Deux Epistres faistes sur le voyage des Indes, ...enuoiees par maistre Francois xavier... Paris, I. Corbon. BNF (Mf).

1596

Epistolarum Libri Quattuor, Ab Horatio Tursellino...in Latinum Conversi, Romae. 天理大学/(L222)

1600

F. Xaverii Epistolarum...Ab H.T..., Moguntiae, apud B. Lippium. 東京大学/(L245)

1628

Lettres du B. pere saint Francois Xavier, de la Compagnie de Jesus..., traduites par un P. de la mesme compagnie. Paris, S. Cramoisy. 国際日本文化研究センター;天理大学/(L388)

II ザビエル伝

17世紀バロック絵画に影響を与えた挿絵の肖像版画の有無も記した。

a) トルセリーニHoratio TORSELLINIによる伝記とヨーロッパ各国語への翻訳書

1594

HORATII TVRSELLINI E SOCIETATE IESV, DE VITA FRANCISCI XAVERII... ROMAE, Ex Typograpgia Gabiana, 筑波大学;上智大学KB;天理大学;BF/(L218)

復刻版 叢書Classica Japonica, Facsimile Series in the Tenri Central Library, 1972

1596

DE VITA FRANCISCI XAVERII... ANTVERPIAE, I. Trognaefij, 肖像版画(Wierix)/日本大学;BNF;BL.

1596

DE VITA FRANCISCI XAVERII... Libri Sex, ...Xaverii Epistolarum ..., Romae, A.Zanetti. 肖像版画(GALLE)/筑波大学;上智大学KB;東京大学附属図書館;BL;BNF/(L221)

1597

De vita Francisci Xaverii..., Leodii, H.Houij. 肖像版画/大分市歴史資料館;BNF;BF;BL.

1600

VIDA DEL P.FRANCISCO XAVIER, trad. en Romance por el P.P. de Guzman, Valladolid, I.Godinez de Millis. 肖像版画/東洋文庫/(L247)

1605

Vita Del B.Francesco Saverio..., trad... da L. Serguglielmi, Firenze. 天理大学;慶応大学/(L267)

1606

Vita del B.Francesco Saverio, Milano, Bordone & Lacarni, trad.da L. SERUGLIENI. 肖像版画/上智大学KB/(L274)

1607

De Vita B. Francisci Xaverii, Lvgydni, P. Rigavd. 肖像版画(DE ZETTRE)/川崎市市民ミュージアム;BNF

1608

La vie du bien-heureux P. Francois Xavier, trad. en françois par le P.M. Christophe, Davay, B. Bellere au Compas d'or. 肖像版画(BONIFACIO)/筑波大学;東京大学史料編纂所;東洋文庫;BNF/(L282)

1610

De Vita B. Francisci Xaverii, ...Coloniae Agrippinae 肖像版画/東洋文庫;BNF;BL/(L291)

1611

LA VIE BIEN-HEVREUX P. FRANÇOIS Xavier..., Mise en françois...par le p.M. COYSSARD, ...Lyon, I. Pillehotte. 肖像版画(P. Edmond Augerによるソネットがつく)/BNF;天理大学/(L303)

1612

同前 慶応大学;天理大学;東洋文庫;BNF/(L303)

1620

Vida de s.F.X..., Pamplona, tad. por el P. P. de Guzman... 東洋文庫

1620

Compendio Da Vida...Do Beato P. Francisco Xavier. Trad...por D. MOTEIRO. Lisboa. 上智大学;天理大学/(L345)

1621

De Vita B. Francisci Xaverii...H. Tursellini, Coloniae Agrippinae. 長崎純心大学/(L350)

1632

The Admirable Life of St. Francis Xavier... transl. into English by T. Fitzherbert, Paris. 長崎県立図書館/(L410)

b) ルセーナIoam DE LUCENAによる伝記

1600

HIISTORIA DA VIDA DO PADRE FRANCISCO DE XA VIER, P.Crasbecck, Lisboa. 肖像版画/天理大学;上智大学KB/(L244)

c) ビネLe R.P.Etienne BINETによる伝記

1622

L'Abregé de la vie admirable de S.F.Xavier... S. Chapelet, signé BERGERON. BNF; BF (1621年版、1630年版もある。特に後者には、Th.Galleによる38点の版画がある)

◆◆主要参考文献

A 文献目録

ここでは、参考図書的な価値を持つ、独立した、あるいはそれに相当する文献目録だけを引用する。

I イエズ会関係

Carayon, A., *Bibliographie historique de la Compagnie de Jésus*, 1864, 復刻版 Genève, Slatkine, 1970.

Sommervogel S.J., C., *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*, 1890-1960, A. Picard, t.1-12., nouv.éd. (1960 Louvin).

Laures S.J., J., *Kirishitan Bunko* 吉利支丹文庫, Sophia University, Coll. Monumenta Nipponica Monographs no.5, 1957, third, revised and enlarged, ed.

II 日欧交渉史関係

松田毅一(編)『日欧交渉史文献目録』一誠堂、1964年

『対外交渉史文献目録・近世篇』京都外国語大学付属図書館編、雄松堂、1977年

III 南蛮の美術と文化関係

坂本満『南蛮文化文献目録』ポルトガルと南蛮文化展一めざせ、東方の国々(展覧会カタログ)、1993年 p.249-252.

ボルジェス・デ・ソウザ、C.『Bibliography』同上、p.253-258.

坂本満、井出洋一郎、越智裕二郎、日高薫編『南蛮文化主要文献目録』国立歴史民俗博物館研究報告(南蛮美術総目録:洋風画篇)第75集、1997年、3月、p.370-376.

B-1 ザビエルに関する図像学文献

☆下記の木村論文1996の、註1-12では、1996年以前に、欧文・和文で刊行された研究を網羅している。以下にはそこに含まれないもの、並びにそれ以降の研究を記す。

Künstler, K., *Ikongraphie der christlichen Kunst*, 1926, t. II, p.255-256.

Serrão, V., *Quadros de Vida de S. Francisco Xavier*, *Oceanos*, 1992, no.12, nov. p. 56-69.

Serrão, V., *Lenda de São Francisco Xavier pelo pintor André Reinoso*, 1993, Lisboa, Quetzal.

木村三郎『〈聖フランシスコ・ザビエル像〉の図像展開と17世紀初頭におけるその作品目録』日本大学芸術学部紀要』1996年、第26号、p.87-99.

木村三郎『写真資料に基づく西洋近世絵画における図像学研究』平成6~8年度科学研究費 補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書』1997年、3月、(『インドで布教する聖フランシスコ・ザビエル』の図像についての考察)p.13-23を含む)

Gutiérrez, F.G., *San Francisco Javier*, 1998, Sevilla, Guadalquivir.

木村三郎『16-17世紀における〈煉獄〉の図像についてノート』日本大学芸術学部紀要』1998年、3月、第27号、p.101-113.

木村三郎『リバーバ/ルーベンス/ペロリー……ルーベンス作〈聖フランシスコ・ザビエルの奇跡〉について』日本大学芸術学部紀要』1998年、7月、第28号、p.55-60.

木村三郎『神戸市立博物館所蔵〈聖フランシスコ・ザビエル像〉についての一考察……西洋の図像伝統から見た視点』美術史』1998年、第145冊、p.174-189/12.

若桑みどり『京都大学蔵〈聖母一五玄義図〉のザビエル像について』『聖フランシスコ・ザビエル渡来記念450周年記念国際シンポジウム'98』要旨、1998、p.51-58.

坂本満『キリシタン美術と洋風画の荒廃』同上、p.7-16.

B-2 ザビエル関係一般(含、イグナティウス・デ・ロヨラおよびイエズス会)

アルベ神父 井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄』全2冊、岩波文庫、1949年

イエズス会編訳『聖イグナチオ・デ・ロヨラ書簡集』平凡社、1992年

尾原悟『ザビエル』清水書院、1998年

加藤知弘『ザビエルの見た大分』葦書房、1985年

岸野久『西欧人の日本発見ーザビエル来日前日本情報の研究』吉川弘文館、1989年

岸野久『ザビエルと日本ーキリシタン開教期の研究』吉川弘文館、1998年

河野純徳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社、1985年

河野純徳『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』平凡社、1988年

チースリク、II.『フランシスコ・ザビエル希望の軌跡』女子パウロ会、1998年

トムソン、F. 中野記偉訳『イグナチオとイエズス会』講談社学術文庫、1990年

結城了悟『ザビエル』聖母の騎士社、1996年

結城了悟監修・解説 高原至写真『ザビエルの道』ナガサキ・フォトサービス、1988年

吉田小五郎『ザビエル』新装版(人物叢書)、吉川弘文館、1988年

レクリヴァン、P. 鈴木宣明監修 垂水洋子訳『イエズス会』(『知の再発見』双書)、創元社、1996年

CNCDP (ed.), *Oceanos*, número 12, *Os Jesuítas e a Ideia de Portugal*, Novembro 1992, Lisboa.

Epistolae S. Francisci Xaverii atiaque eius scripta, eds. G. Shurhammer & I. Wicki, 2 vols., Roma, 1944, 1945.

Lucena, João de, *História da Vida do Padre Francisco de Xavier*, 4 vols., ed. L. de Albuquerque, Lisboa, 1989.

Recondo, J. M., *Francés de Xavier*, Pamplona, 1970.

Serrão, V., *A Lenda de São Francisco Xavier pelo Pintor André Reinoso. Estudo Histórico, Estórico e Iconológico de um Ciclo Barroco existente na Sacristia da Igreja de São Roque*, Lisboa, 1993.

C 『日欧交渉史関係(含、キリシタン史・キリスト教史・キリシタン語学・ポルトガル海外発展史)』

アイザン、A.J. 大東文化大学現代アジア研究所監修 多田・篠田・片岡訳『インドの伝統技術と西欧文明』筑摩書房、1998年

朝尾直弘『日本の歴史17 鎖国』小学館、1975・1981年

朝尾直弘『日本近世史の自立』板倉書房、1988年

姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』国書刊行会、1976年(復刻原本1926年)

姉崎正治『切支丹禁制の終末』国書刊行会、1976年(復刻原本1926年)

姉崎正治『切支丹伝道の興廃』国書刊行会、1976年(復刻原本1930年)

姉崎正治『切支丹迫害史中の人物事蹟』国書刊行会、1976年(復刻原本1930年)

姉崎正治『切支丹宗教学』国書刊行会、1976年(復刻原本1932年)

荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988年

アルヴァレス、M. アルヴァレス、J. 金七紀男 岡村多希子 大野隆男訳『ポルトガル日本交流史』彩流社、1992年

『アンソロジー-新世界の排戦』岩波書店、1992/93年

飯塚浩二『比較文化論』白鳥書院、1948年

飯塚浩二『アジアの中の日本』中央公論社、1960年

飯塚浩二『世界史と日本史のあいだ』岩波書店、1960年

生田滋『ヴァスコ・ダ・ガマー東洋の扉を開く』(大航海者の世界)、原書房、1992年

生田滋『大航海時代とモロッカ諸島ーポルトガル、スペイン、テルナテ王国と丁子貿易』中公新書、1998年

井沢実『大航海時代夜話』岩波書店、1977年

井塚政義、飯田賢一監修 種子島開発総合センター編『鉄砲伝来前後ー種子島をめぐる技術と文化』有斐閣、1986年

井手勝美『キリシタン思想史研究序説』ベリかん社、1995年

井上章編『天草版 伊曾保物語』風間書房、1964年

彌永信美『幻想の東洋ーオリエンタリズムの系譜』青土社、1987年

吹の交流16—17世紀』図録、1989年

仙台市博物館編『世界と日本—天正・慶長の使節—』図録、1995年

高橋正『南蛮都市図屏風からカエリウス世界史へ』葛川絵図研究会編(絵図のコスモロジー上巻)』地人書房、1988年

高見澤忠雄『新発見の狩野山楽系(南蛮屏風)』『古美術37』

武田恒夫『日本の美術20 近世初期風俗画』至文堂、1967年

武田恒夫『桃山の花鳥と風俗』(NHKブックス)、日本放送出版協会、1971年

武田恒夫、小林忠、切畑健、松田修、菊池貞夫共著『日本屏風絵集成14 風俗画—遊楽誰袖』講談社、1977年

武田恒夫、辻惟雄、守屋毅、川上實、内藤昌、狩野博幸、小沢弘共著『日本屏風絵集成11 風俗画—洛中洛外図』講談社、1978年

田中喜作『桃山時代障屏風概説補記—当代洋風画の金地絵に就て』『美術研究78』

田中健夫『中世対外関係史』東京大学出版会、1975年

たばこと塩の博物館編『航路アジアへ! 鎖国前夜の東西交流』図録、1998年

丹野郁『服装史に見る文化交流の研究—南蛮服装を中心として』丹野郁教授退官記念論文・埼玉大学教育学部・家政学研究研究室』1982年

津久見市編『宗麟と南蛮文化—津久見市収集10年の精華—』図録、1996年

辻惟雄『南蛮屏風』『古美術21』

土浦市立博物館編『地球儀の世界』図録、1994年

土浦市立博物館編『世界図遊覧—坤輿万国全図と東アジア—』図録、1996年

土井久美子『蒔絵聖龕—桃山時代輸出漆器資料—』『漆工史11』漆工史学会、1988年

土居次義『狩野山楽と南蛮屏風』『古美術3』

土居次義『福井家蔵の南蛮屏風について』『国華737』

東京国立博物館『東京国立博物館版目録キリシタン関係遺品篇』(東京国立博物館)東京美術、1972年、東洋の漆工芸、1977年

鶴田忠正『西川如兄著『肆拾貳国人物図説』源流考』長崎県立美術博物館報、1968年度版』

鶴田忠正『初期洋風画(王侯騎馬図)源流考』『美術史108』

外山卯三郎『南蛮屏風に描かれたるカピタン・モールについて(上、下)』『大和絵研究1—2、3』

豊田武『堺』(日本歴史新書)至文堂、1957年

長崎県立美術博物館編『近世長崎のあけぼの』図録、1987年

中村拓『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図』(全3巻)、東洋文庫、1966~67年

檜崎宗重『南蛮来航図(唐招提寺蔵)』『国華669』

檜崎宗重『南蛮貿易船図(小林中氏蔵)』『国華675』

檜崎宗重『洋人遊楽図(増田源三氏蔵)』『国華676』

檜崎宗重『南蛮貿易図(萩原安之助氏蔵)』『国華764』

檜崎宗重『南蛮貿易図屏風(原田吉蔵氏蔵)』『国華794』

檜崎宗重『南蛮屏風(サントリ—美術館蔵)』『国華852』

檜崎宗重『南蛮人來朝屏風の系統について』『国華881』

檜崎宗重『肥前名護屋城図と狩野光信』『国華915』

檜崎宗重『南蛮貿易屏風』『古美術28』

成澤勝嗣『狩野内膳考』『神戸市立博物館研究紀要2』

成瀬不二雄『南蛮絵と紅毛画のはざま』論集日本の洋学1』清文堂出版、1993年

南蛮の美展実行委員会『南蛮の美』図録、1986年

西村貞『日本初期洋画の研究』全国書房、1945年

西村貞『南蛮美術』講談社、1958年

西村貞『キリシタンと茶道』全国書房、1966年

西村貞『日本銅版画志』全国書房、1971年

灰野昭郎『日本の美術231 漆工(近世編)』至文堂、1985年

灰野昭郎『近世の蒔絵』中公新書、1994年

福岡市博物館編『大航海時代と博多』図録、1990年

福永重樹『南蛮屏風に描かれたイエズス会士の服装について』『キリシタン文化研究会会報 第11年2・3号』

福永重樹『(聖フランシスコ・ザビエル像)に就いての考察』『キリシタン研究14』吉川弘文館、1972年

藤懸静也『南蛮屏風の研究』『国華586』

フラム、G.H.『聖愛と俗愛—桃山時代の日本における東西画風の手合い』『国華1041』

フラム、G.H.『レバント戦闘図』と『世界地図』屏風—双について』日本屏風絵集成15 風俗画—南蛮風俗』講談社、1979年

ホセ・アウグスト・フランサ『南方から到着したポルトガル人—ポルトガルの美術館所蔵の“南蛮屏風”—』『美術史における日本と西洋』中央公論美術出版社、1995年

松田毅一『坂本満編『近世風俗図譜13南蛮』小学館、1984年

松本賢一『南蛮紅毛日本地図集成』鹿島研究所出版会、1975年

三好唯義『ポルトガル地図学史上における日本地図の変遷』『神戸市立博物館研究紀要1』

三輪英夫『洋風画法による違磨図について』『美術研究311』

室賀信夫『日本古地図大成世界篇』講談社、1975年

森村健一『福建省漳州・月港と漳州窯系陶磁の貿易』『網干善教先生古希記念考古学論集』網干善教先生古希記念会、1998年

山崎剛『桃山時代輸出漆器の意匠展開に関する一考察—洋櫃を中心として—』『大阪市立博物館研究紀要23』大阪市立博物館、1991年

山下和正『江戸時代古地図をめぐる』NTT出版、1996年

山根有三『日本の美術17 桃山の風俗画』平凡社、1967年

矢守一彦『古地図への旅』朝日新聞社、1992年

吉田雅子『慶長遣欧使節請来の祭服に関して』『ミュージアム552』東京国立博物館、1998年

吉田小五郎訳『キリシタン大名(日本歴史新書)』至文堂、1954年

吉村元雄『輸出漆器—洋櫃について—』『大和文華60』大和文華館、1975年

吉村元雄『江戸時代輸出漆器基礎資料集』『人文論究26-2、3』関西学院大学人文学会、1976年

読売新聞社大阪本社編『天正ローマ使節派遣400年南蛮美術展務図録、1982年

若桑みどり『天草版『ヒイデスの導師』(1592年刊)扉絵(不信のトマス)の図像源泉とその意味』『キリシタン文化研究会会報』1997年11月

Baptista Pereira, F. A., *Arte Portuguesa da Época dos Descobrimientos. Portuguese Art at the Time of the Discoveries*, CTT Correios de Portugal, 1996.

CNCDP (ed.), *Oceanos, número 19/20, Indo-Portuguesmente, Setembro/Dezembro 1994, Lisboa.*

CNCDP (ed.), *Álvaro Pires d'Évora. Um Pintor Português na Itália do Quattrocento*, Arquivos Nacionais/Torre do Tombo, Lisboa, 1994.

CNCDP & Câmara Municipal de Évora (eds.), *Um Pintor de Évora Francisco Henriques no Tempo de D. Manuel I*, Museu de Arte Sacra da Sé de Évora & Museu de Évora, 1997-1998.

Mendes Pinto, M. H., *Lacas Namban em Portugal. Presença Portuguesa no Japão*, [Lisboa], 1990.

Secretaria de Estado da Cultura (ed.), *De Goa a Lisboa. A Arte Indo-Portuguesa dos Séculos XVI a XVII*, Museu Nacional de Machado de Castro, Coimbra, 1992.

Secretaria de Estado da Cultura & IPM (eds.), *No Tempo das Feitorias. A Arte Portuguesa na Época dos Descobrimientos*, 2 vols., Museu Nacional de Arte Antiga, Lisboa, 1992.

資料・参考文献は以下が分担して編集した。
 ◆:木村三郎 ◆◆A、B-1:木村三郎
 ◆◆B-2、C:日禁博司 ◆◆D:井深明/坂本満/日禁博司

St. Francis Xavier before a King of Japan — A painting by Van Dyck

Kimura Saburo
Professor, Nihon University

I. Who Painted this Work? Early Research on this Issue

The painting known as *St. Francis Xavier before a King of Japan* (fig. 1, cat. no. 50) and included in the present exhibition was long thought to have been painted by the great Flemish painter Van Dyck. The oldest material indicating the painter of the work is the Schloss Weissenstein collection catalogue published in 1719. This catalogue records the work as by "Don Ant. van Dyck." Later catalogues of the museum continued to quote this attribution to Van Dyck until the middle of the 19th century. A reliable catalogue of the collections was finally created in 1894, and the author of the 1894 catalogue, Von Frimmel, was the first to study to the question of attribution. As a result of Von Frimmel's work, the painting was then given the attribution, "in the style of Van Dyck."¹ The curatorial department of the museum has concurred with this earlier attribution.² But in my opinion, a part of this work must have been painted at least by Van Dyck himself, because of the document written by Byss at the beginning of the 18th century and also of the stylistic character of the figure of St. Francis Xavier. So the date of execution would be around 1641, when Van Dyck visited Paris shortly before his death^(2bis).

II. What is Portrayed in this Work?

This painting shows two figures in profile in close-up view in the foreground of the composition, and they seem to be exchanging intimate greetings. The figure on the left is dressed in the white *alb* of a member of a religious order, and as indicated by the title given to the work, this figure is St. Francis Xavier. The saint is bending down slightly, has both arms spread and seems to be showing his respect for the figure standing in a position of higher rank. From the carved column in the background we can conclude that this scene is taking place in a palace. The second of the two large, central figures is standing on stairs, two steps up from Xavier,³ with his left hand held to his chest and his right hand extended, implying his good intentions of welcome to the figure on the left, thought to be Xavier. Behind these two central figures, there are three European-looking figures on the left, perhaps accompanying Xavier, and on the back right, a soldier stands in full armor and helmet, with his right hand holding a staff. This soldier is clearly an attendant to the aristocratic central figure, and his skin can be seen as Asian in tone (or a darker skin color than the others).

But who is this aristocratic figure welcoming Xavier in this painting? In other words, what is the actual subject of this scene? I would like to explore this topic briefly.

In this article I have chosen not to specifically identify the figure seen with Xavier. However, during a careful reading of the provenance materials related to this work in the course of my survey for the present exhibition my attention fell on the fascinating title given to the work, referring to the figure as the "Kaiser von Japonien." As mentioned above, this title can be confirmed for the work in the 1719 catalogue.⁴ This title then became part of the basic information on the work and has been used up until our own century, where it can be seen in the writings of the German scholar Fischer.⁵ While it is not easy to translate this terminology into the Japanese language, it might be translated as *Nihon no ô*, literally "King of Japan."

III. An Audience with a High-Ranking Personage and the Tradition of this Imagery

1. Resemblance to 16th Century Flemish Prints

The subject of an audience with a king or a high-ranking personage is not rare in western art. Here let us consider figures 2 through 5 as typical examples of such a theme. Figure 2 is *St. Peter and St. John before the High Priest* by Philippe Galle, based on a painting of 1558 created by Maerten van Heemskerck. In this work the two saints stand before the high-ranking figure of the high priest seated in a throne-like chair on a raised dais from which he receives the two men. The central group is surrounded by onlookers.⁶

Galle also created a print entitled *St. Stephen before the High Priest* (fig. 3)⁷ which shows the same composition, though here reversed right to left. There is no major change, however, in the basic nature of the subject, or in the relationship between the saint and the high priest. The high priest is seated on his throne which is placed on a raised dais, while St. Stephen stands before him. The background and surrounding scene, as in the St. Peter and St. John image, reveal architectural elements reminiscent of a palace.

Figure 4, also a print by Galle, shows *Achior before Holofernes*, and was created in 1564. This is not an image of a saint. Rather, here we have Achior standing before a figure jealous of his power, arranged in a figural relationship similar to those seen above. Here the fascinating point is that Holofernes is seated on a throne on a raised dais, but there is almost no change in the figural expression of the relationship between higher and lower ranking figure. Another work is here reproduced as figure 5, a print entitled *Moses and Aaron before Pharaoh* by the Flemish print artist Cornelis Cort.⁸ Here the format is changed to a vertical composition and the authority of the pharaoh is visually heightened by his placement on a dais above the two who have come to speak to him. In any event, a comparative analysis shows that the majority of examples of this theme in 16th century Flemish prints, i. e. during the period when Van Dyck or other artists were able to study these prints, show the high-ranking personage placed in a higher position, either on steps or a dais.

Let us now reconfirm the placement of two steps in the lower right of the composition of the painting under discussion, figure 1. Here too we find a similar relationship between the two central figures. Thus, we can surmise that this painter, regardless of the difference in subject matter, chose to follow the general visual tradition of this period for the details of his work when he depicted themes which incorporated elements found in other religious subjects.

2. The differences and special characteristics of this work

After confirming these similarities with other works of the period, now let us turn to the differences this work exhibits. To repeat, this work shares the figural depictive methods used for the depiction of aristocratic personages found in figures 2 through 5, namely with the high-ranking figure placed on a dais. However, regardless of the fact that the high-ranking figures in figures 2 through 5 are all seated on thrones, the person thought to be a "king" on the right of the figure 1 composition is not shown as seated. Rather, he is clearly shown as standing, and even further, we can note in the far right corner that his foot is raised from the step. Clearly this person has stood up and is moving forward, giving the strong impression that he is welcoming Xavier, who is standing before him. I believe that he has emerged from the palace indicated on the right of the composition, and is coming forward to greet this visitor from the west. This standing and moving forward in an attitude of greeting is rare in related works from the western visual tradition, and I would now like to explore the relationship between these two men implied by this compositional device.

IV. Indeed, is this a Japanese person?

Now let us consider the issue of who the "King of Japan," described

in the early 18th century record, might be. The reader of this article, or the viewer of this exhibition, might simply ask, is there some relationship between this painting and Japan? It is an extremely natural question to consider. In fact, there is nothing Japanese in the composition, either in figures or in their setting. The aristocratic personage is dressed in western-like clothing and wears a crown on his head. His gestures are also western in nature. By comparison, let us consider the image shown here as figure 6, Nicolas Poussin's 1641 work, *The Miracle of St. Francis Xavier*. This image of Xavier by a French painter of the 17th century (thought to be the period in which figure 1 was also painted) shows some figures in the back of the lower group of figures who are almost bald, and who somewhat resemble an Asian figural type. However, the women depicted in this group are all wearing western style clothing. Poussin was known as a painter who carefully researched his subjects in order to depict them properly, but even he was stymied by the lack of visual information available on Japan at that time.⁹ Thus it might seem that the painter of figure 1 is, in fact, painting a scene of a meeting with a "western king." In a period which saw India and Japan as all part of the same region, the painter may have depicted the soldier in the background of figure 1 with a darker skin tone as an indication of his level of understanding of Asian people's physical appearance.

V. Xavier's Missionary Activities in Japan as Depicted in Mendes Pinto's *Perigrinaçam*

The fact that Xavier came to Japan as a missionary was widely known in Europe in the latter half of the 16th century. His writings noted in Cochin in 1552 were conveyed to Rome, were transcribed many times and were finally published in Latin. Numerous editions of his biography were also published.¹⁰

On the other hand, Xavier's missionary activities were also recorded in the literature created about Asia during this period, as fascinating glimpses of experiences in the unknown countries of the Far East. Fernão Mendes Pinto's *Perigrinaçam* published in Lisbon in 1614 is an example of this kind of writing (fig. 7).¹¹ Pinto was born ca. 1509-12 and centered his activities in Malacca, visiting Sumatra, China, Japan and other countries as he built a fortune. In 1551, on his third visit to Japan, Pinto is said to have met St. Francis Xavier and become a close associate of the missionary. Pinto abandoned his wealth and entered the Jesuit novitiate. He visited the Japanese region of Bungo as the Viceroy of India, accompanied by Jesuits. Almost immediately after this trip, Pinto left the Jesuit brotherhood and returned to Portugal. He then wrote his novel near Lisbon and died in 1583.¹²

As seen in the sub-title of this book, published on its cover, Mendes Pinto recorded a number of Xavier's actions and also Xavier's death near the end of this book. This adventure story was extremely well-received by Europeans. As a result, the book was translated into French, with French versions published in 1628 (fig. 8) and 1645. A Dutch edition was published in 1652 and the English edition of the book was published in 1653.¹³

3. The importance of the chapter on Bungo

a. The meeting between Pinto and Xavier

Leaving aside the question of the novel's historical accuracy, here I will briefly summarize the meeting between Pinto and Xavier as described in the novel's 200th and following chapters. Pinto visited Japan and there went to Fuchu in Bungo with Jorge Álvares. Violence erupted, the king was killed, and the country became unstable. Pinto then retreated to Yamakawa on Kagoshima Bay. When he set sail from the port of Yamakawa, he took with him two Japanese, Anjiro and his attendant. They went with him to Malacca where he brought them before Francis Xavier. Thanks to Anjiro, Xavier decided to spread Christianity in Japan. They set sail from Malacca on a Chinese junk and landed in Kagoshima on the 15th day of August, 1549. One year later, they moved to Hirado, and then set out to Kyoto to visit the reigning Emperor.

They did not attain their goal, however, and went instead to Yamaguchi where they converted 3,000 Japanese. Learning that a Portuguese ship had entered the port at Bungo, they traveled to Bungo where they visited the daimyō lord of Bungo.¹⁴

b. Scene of a Presentation to Sōrin

The meeting between Xavier and the military ruler of Bungo during that period, Ōtomo Sōrin, is recorded in Xavier's own writings, but this record is extremely simple and brief. It only states, "Ho dunque me fex muito gasalhado..."¹⁵

The facts of this case were also noted by Pinto. The following is the Chapter CCX "Des honneurs que le Roy de Bungo fist au Reuered Pere Xavier à cette première entre-veü" from the 1628 French version of Pinto's tale:¹⁶

"De cette salle nous entrasmes dans vne autre chambre, où il y auoit vn grand nombre de Seigneurs du Royaume, qui rendirent beaucoup d'honneur au Pere là il demeura debout quelque temps s'entretenant avec le frere du Roy, iusques à ce que d'vne autre chambre on s'en vinst luy dire [p. 1088] qu'il entrast: ce qu'ayant faict aussitost, accompagné de la pluspart des Seigneurs, il se treouua dans vne chambre fort riche où le Roy l'attendoit debout, qui le voyant le vint recevoir à cinq ou six pas du lieu où il estoit assis. [A] Le Pere voulut incontinent se prosterner à ses pieds, mais le Roy ne le voulut iamais permettre, au contraire luy ayant avant aydé luy-mesme à se leuer, il luy fist par trois fois les gromenares, qui est le compliment dont l'ay parlé cy-deuant; dequoy tous les Seigneurs qui estoient là presens furent grandement estonnez, & nous le fusmes encore bien dauantages: [B] apres cela l'ayant pris par la main, le frere du Roy qui auoit là conduit le Père, se tira vn peu à l'escart, & s'assiat sure le marchepied du Throsne du Roy [C], qui voulut que le Pere fust assis à ses costez, & les Portugais prez des Seigneurs de son Royaume qui s'y treouuerent... [p. 1089]."

In a comparison between these two accounts we can see that Pinto's impressions differ from the writings of Xavier, and we can also see the rich depiction of the scene as described by Pinto. Here I would like to focus on the description in Pinto's text and the image depicted in figure 1. First, let us consider the section underlined as A. As we have seen in our comparison of this painting with the 16th century Flemish prints, the thing which distinguishes figure 1 from the general presentation scenes is the fact that the high-ranking personage is on his feet, and indeed, his left foot is raised as if he is walking in from the right side of the composition. My first point is that Pinto's description and this painting thus are in accordance. Next, it is fascinating to note the actions of the figure welcoming Xavier, namely the raising of his left hand to his chest and the extending of his right hand forward. This can be seen as corresponding to the section in Pinto's text underlined as B. Isn't this clearly representative of the title of this chapter of Pinto's book, loosely translated into English as "the respect for Priest Xavier shown by the Bungo daimyo upon their first meeting?"¹⁷ Further, when we consider the meaning of the steps shown in the lower right section of the painting, our first thought must be that they refer to the iconographic tradition seen in the prints discussed above. However, in addition, we must also note the phrase of Pinto's text here marked as C. We might also consider that the painter of this work was aware of the existence of a throne to the right of the composition.

c. The fascinating aspects of the story — Its divergence from historical fact

As seen in this quote from the 17th century French edition of Pinto's text, the book described the meeting between Xavier and the Daimyo of Bungo in considerable detail over several chapters. The reader of this text is fascinated by the vivid depiction and rich details included in the unfolding tale. Ironically, it is the very lively nature of this description which has been poorly received by historians. The description,

which seems to present an eye-witness account of the meeting, reveals a number of things which seem to be a false representation of the facts.¹⁸ We can get a sense of these discrepancies just from the passage quoted here. However, conversely, we might consider that when a Flemish painter of this period was commissioned, by the Jesuits, to paint this scene, he was most likely handed a copy of Pinto's text and that it was this text, more than historical fact, which became the model for his depiction.

d. Is this the Emperor? Or possibly another Sengoku Period *daimyo*?

Before we can draw our conclusions about this painting, we must first consider several remaining issues. First, there is the meaning of the German term "Kaiser" used to describe this painting at figure 1 in the 1719 record. In modern German this corresponds to the modern Japanese term translated into English as Emperor. However, at the time this catalogue was written at the beginning of the 18th century, it is hard to imagine that its authors were able to obtain reliable information about the history of an island nation in the Far East. It is likely that they inferred this name from the political situation in Germany at the time, and gave this term as a generalization for the rank above that of "König."¹⁹

Next, there remains the question of how to handle the information that Xavier met *daimyo* lords other than Sōrin of Bungo. From Xavier's writings we can see that after arriving in Kagoshima,²⁰ Xavier proceeded to Hirado and there spent two months, to paraphrase Xavier, "thanks to the generous welcome of that region's lord."²¹ Clearly Xavier's later meeting with Ōuchi Yoshitaka was one of the important meetings between Xavier and the *daimyō* of the day during Xavier's stay in Japan.²² Indeed, as seen from the painting in figure 9 (cat.no. 49), can represent *St. Francis Xavier Received by Yoshitaka Ōuchi*;²³ this might lead us to consider that the painting shown at figure 1 could represent the meeting between Xavier and Ōuchi Yoshitaka. However, at present I have not been able to obtain materials related to Matsuura or to Ōuchi which might provide a logical explanation of the image seen in figure 1, the lordly figure enthusiastically welcoming Xavier, going so far as to rise to his feet for the occasion.

e. The existence of related prints depicting the reception by the Bungo *daimyo*

The meeting between Xavier and Ōtomo Sōrin is also seen in the print of unknown date shown here as figure 10. As indicated by the inscription on the bottom of the work, this picture was intended to show Xavier proselytizing the Catholic faith. It shows Xavier presenting the Madonna to the "König von Bungo," who is seated on a throne on a traditional raised dais. The inscription indicates that Xavier was welcomed by this *daimyo*.²⁴ In the background and surrounding space we can note figures which seem to be a melange of Indian and Japanese physiognomies. Another work, here shown as figure 11, is thought to have been produced in Italy at the end of the 18th or beginning of the 19th century. This print depicts Xavier telling the "Re di Bungo" about the Catholic faith and showing him a crucifix. Here too the *daimyo* is shown seated on a throne placed on a dais, looking pensive with his hand to his chin as he listens to Xavier.²⁵

In any event, it was well known in Europe that Sōrin was baptized Christian *daimyo*, and it is not hard to imagine that this made him more important in the eyes of the Europeans than the other *daimyo* of his day. These prints, of course, post-date the painting seen at figure 1, but still they might be seen as indirect evidence in our search for an understanding of the painting at figure 1.

VI. Conclusion

Following from the above discussion, it becomes reasonable to suggest that this painting of Xavier in the collection of Schloss Weissenstein depicts Ōtomo Sōrin welcoming Xavier. Thus, this painting's formal title can be given as "St. Francis Xavier Received by Ōtomo Sōrin,

Daimyo of Bungo."

Footnotes and Plate List (Kimura text)

1) The following are the materials I have been able to access in this study. I would like to express my sincere appreciation to Dorothee Feldmann, M.A. for her kind assistance with the first 7 items.

1719 Byss (J. R.), *Virtrefflicher Gemäld und Bilder-Schatz*, Bamberg, G. Kurb, no. 81, H. 6'6" Br. 4'9", Don Ant. van Dyck (these measurements and attribution remain in succeeding documents until the 1857 record).

1746 *Beschreibung des Virtrefflichen Gemähd und Bilder-Schatzes*, Wirtzburg, M. A. Engman, no. 49.

1774 *Verrzeichniß des Schildereyen in der Gallerie*, J. C. Posch, no. 31, p. 13.

1857 *Katalog des gräflich von Schönborn'schen Bilder-Gallerie zu Pommersfelden*, Würzburg, hein, no. 588.

1867 *Galerie de Pommersfelden, catalogue de la collection de tableaux anciens*, Paris, J. Claye, no. 169, p. 69, T. H., 1 m, 95. — L. 1 m 37. Dyck (Anton van).

1894 Von Frimmel (T.), *Verzeichnis der Gemälde in gräflich Schönborn-Wiesentheid'schem Besitze*, Pommersfelden, zusammengestellt von Dr. T. von R., In der Art des Antoni van Dyck, no. 165, p. 68. (The next source gives the same attribution information. However, this source also suggests the possible artist name of Erasm. Quellinus).

(After) 1923 Fischer (H.), *Gemäldeverzeichnis*, no. 327 (165).

1980 Larsen (E.), *L'opera completa di Van Dyck 1613-1626*, Rizzoli, t. II, no. A80, p. 132, reprod..

1988 Larsen (E.), *The Paintings of Anthony Van Dyck*, Luca, p. 459, no. A151, reprod..

2) See internal documents of the museum dated to September 3, 1986. This document records the authentication provided by Professor Voss. He confirms the high quality of the work and states that he does not believe that the work is by the hand of Quellinus.

On the other hand, Larsen, a modern scholar of Van Dyck, provides an analysis of this artist's œuvre in the previously mentioned catalogue raisonné. As a result of these studies, he states that this work previously attributed to Van Dyck is not by that artist's hand and suggests that the painting was created in Van Dyck's studio by Th. Boeyermans who displayed a style similar to Van Dyck's. However, recent reliable scholarship on Boeyermans does not support this interpretation by Larsen. Thus we must consider this attribution the unconfirmed personal opinion of Larsen.

2bis) This problem will be discussed in the other article.

3) The fact that this is a scene of welcome upon the steps of a palace is suggested in the notes on the painting found in the 1857 record. "Der hl. Franziscus Xaverius wird vom Könige von Japan im königl. Ornate auf den Stufen seines Palastes empfangen." (1857, *op. cit.*, no. 588).

4) 1719, *op. cit.*, no. 81: "Der h. Franc. Xaverius bei dem Kaiser von Japonien mit verschiedenen ganzen Figuren." But this term "Japonien" was changed to "Japan" in the succeeding 1774 record (*op. cit.*, no. 31) "Der Heil. Franciscus Xaverius bei dem Kaiser von Japon," and here has been translated as "of Japan."

In addition, according to the standard encyclopedic dictionary of the German language from the first half of the 18th century, Zedler (J.H.), *Grosses vollständiges Universal-Lexicon*, t. XIV, 1935, p. 224, Japan was referred to as "Japan oder Iapon."

The "Japonien" reference with its different suffix indicates that the writer was aware that Japan was an island nation and that the military lords of the Sengoku Period had divided its rule. See Xavier's writings for confirmation of this fact. (Schurhammer S. J. (G.) et Wicki S. J. (J.), *Epistolae S. Francisci Xaverii*.... Coll. Monumenta Historica Societatis Jesus, Romae, t. 67 (1945), p. 254, no. 2 [1550].

Extrapolating from this on-site report from the Jesuit records, Zedler (1735, p. 224) also noted that up to 1550 there were "66 Königreichen." We might consider that "Japonien" was used in a similar grammatical fashion to "Philippinen." (I would like to express my appreciation to Onozaki Yasuhiro, assistant professor, Kawamura Women's College and Sanada Shōichirō, professor, Nihon University, for their advice in this regard.)

5) It has been dropped, however, from recent catalogue raisonnés (1980, 1988 Larsen).

6) For information on Galle, see Nagler (G.K.), *Die Monogramisten*...., 1857-76, G. Franz, t. IV, p. 887, no. 2968; For the works on the subject of the lives of the saints in general, see Von Wurzbach (A.), *Niederländisches Künstler-Lexicon*, t. I, p. 566-567, no. 11; Bryan (M.), *Bryan's Dictionary of Painters and Engravers*, 1919 (1903-05), Bell and sons (G. C. Williamson), t. II, p. 211; Dolders (A.), *P. Galle*, 1987, Arabis Books, Coll. The Illustrated Bartsch, no. 56; Catalogue of Collection, Machida City Museum of Graphic Arts, ed., M. Sagawa, 1990, p. 45-47, no. 102. For this specific work, see Dolders, *ibid.*, 1987, p. 144, no. 047; 4, reprod..

7) See also, Dolders, 1987, *ibid.*, p. 155, no. 048:9, reprod. Machida, 1990, *ibid.*, no. 102 (11).

- 8) Von Wurzbach, *op. cit.*, (1906-11) 1968, t. 1, p. 342, no. 64. (1567); Strauss (W.L.) and Shimura (T.) (ed.), *Cornelis Cort*, 1986. Arabis Books, Coll. The Illustrated Bartsch, no. 52, Netherlandish Artists, no. 18-IV (41), p. 25, *reprod.*
- 9) Kimura(S.) "Nikola Pussan saku 'Nihon no kagoshima de shinda musume o yomigaeraseru sei furanshisuko zabieru' no tenkyo ni tsuite" [The Sources for 'Miracle of St. Francisco Xavier' by Nicolas Poussin], *Report of the Society for the Study of Japonisme*, no. 5, 1985, pp. 10-26. French text taken from the revised edition, "La source écrite du Miracle de saint François-Xavier de Poussin," *La Revue du Louvre et des Musées de France*, 1988, no. 5-6, pp. 394-8.
- 10) *H. Tursellini e Societate Iesu, de vita F. Xaverii...*, Xaverii Epistolarum..., 1596, Romae, A. Zanetti, (Kirishitan Bunko, Lares 221). Many other books can also be suggested after this publication.
- 11) See note 13.
- 12) See *Dicionário de história dos descobrimentos portugueses*, 1994 (?), Caminho, dir., de De Albuquerque (L.), E.A.), Japanese edition of Pinto's *Peregrinação*, translated by T. Okamura, Tokyo, Heibonsha, 1979, coll. Tōyō Bunko, t. III, introduction, p. viii.
- 13) The following are a few of the publications of Pinto's *Peregrinação* in various European countries, as confirmed by the author.
- 1614 *Peregrinação...* E no fim della trata brevemente de algũas cousas, & da morte do santo Padre mestre Francisco Xavier,....., Lisboa, P. Crasbeeck (in Tōyō Bunko collection, 0-2-A,49).
- 1628 *Les Voyages Aduantureux.....*. Traducts de Portugais en François par le Sieur B. Figvier...et Dediez a Monseigneur le Cardinal Richelieu..., Paris, M. Henault (in Tōyō Bunko collection, 0-2-A-23).
- 1645 *Les Voyages Aduantureux.....*. Traducts de Portugais en François par le Sieur B. Figvier..., Paris, A. Cotinet...et...I. Roger (in Tōyō Bunko collection, 0-2-A-24).
- 1652 *De Wonderlyke Reizen....*, t'Amsterdam, Voor Ian Hendriks en Ian Rieuwertsz (in Tōyō Bunko collection, 0-2-A,25).
- 14) 1628 *Les Voyages Aduantureux, ibid.*, p. 471-496. Referred to in the Japanese translation by Okamura noted above, 1979.
- 15) "Ho dunque me fez muito gasalhado..." Schurhammer et Wicki, *Epistolae*, 1945, *op. cit.*, p. 271, no. 36, [1550], Japanese translation, *op. cit.*, no. 96, 36, p. 195.
- 16) Underlines by the present author. *op. cit.*, 1628, Mendes Pinto, *Les Voyages Aduantureux...*, chap. CCX, p. 1086.
- 17) One famous story of the meeting between these two is clearly recorded by Tursellino in his biography of Xavier. Here, in terms of the painting at figure 1, the 1608 translation into French is the closest of the many editions of this work. Tursellino (O.), *La vie du bien-heureux Pere Francois Xavier...*, 1608, Davay, B. Bellere (collection of the Historiographical Institute of the University of Tokyo, and in the collection of the Tōyō Bunko (0-17-13,12). This book includes these specific terms in chapter IX "welcoming (reçoit honorablement)", and "standing (debout) and welcoming".
- For example, chapter IX is given the following title "Chap. IX, Allant visiter le Roy de Bongo à son instance, il est accneitly honorablement des Portugais" (pp. 471-477).
- Similarly, Chapter XI is titled "Le Roy de Bongo reçoit honorablement le Pere François, en despit des Bonzies" (pp. 482-496).
- "En fin il est conduit par Ficharondon plus auant en vne derniere salle tres-bien ornee, là où il rencontre le Roy qui l'attendoit debout." (p. 490).
- See the following for the strong influence of this French 1608 edition on the iconography of Xavier: Kimura, 1988, *op. cit.*; Kimura (S.), "Saint François-Xavier prêchant aux Indiens, quelques aspects iconographiques," *Georges de La Tour ou la nuit traversée*, 1994, Serpenoise, pp. 133-43. For information on Tursellino's influence on Rubens, see Smith (G.), "Rubens' Altargemälde des hl. Ignatius von Loyola und des hl. Frans Xavier für die Jesuitenkirche in Antwerpen," *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen in Wien*, 1969, 65, (XXIX), pp. 39-60.
- Regarding the general poses taken by kings, see Schmitt (J. C.), *La raison des gestes dans l'occident médiéval*, 1990, Gallimard, coll. Bibliothèque des histoires, p. 229-232.
- 18) Japanese translation of Rodrigues (J.)'s history of the church in Japan, with translation by M. Ikegami and annotation by T. Doi, et al., 1970 (1622,1634) t. III, ch. 19 (pp. 490-99), ch. 22 (pp. 526-36).
- 19) Grimm (J. und W.), *Deutsches Wörterbuch*, 1873, Hirzel, t. V, pp. 36-9. It is a fact that he traveled to Kyoto and strongly desired an audience with the then reigning Emperor Gonara, but such a meeting was not, in the end, possible.
- 20) There is no record in Xavier's writings regarding whether or not he was received with welcome by the local daimyō during his stay in Kagoshima. However, Pinto writes with great exaggeration regarding the welcome given to Xavier. (see Okumura translation, 1980, III, p. 164). In this sense, there is some possibility that this painting records his welcome in Kagoshima, but there is no other evidence to show a link between this text and the painting at figure 1.
- 21) "Dahy fomos a outra terra, domde ho senhor dela nos recebeo com muyto prazer..." Schurhammer et Wicki, *Epistolae*, 1945, t. II, 96, 14 [194-195], p. 260. Author referred to the Japanese translation by S. Kōno, 1994, p. 178.
- 22) *Ibid.*, 14-35, pp. 259-271; Kōno translation, pp. 177-205.
- 23) Serrão (V.) "Quadros de Vida de S. Francisco Xavier," *Oceanos*, 1992, no. 12, pp. 56-69; Mendes Pinto, *De Goa...*, no. 3, 1992, p. 28; Mendes Pinto (M. H.), *Via Orientalis*, exh. cat., 1993, no. 161, p. 188.
- 24) Number 28 of a series of 32 prints.
- 25) For Fontana (Pietro), see, Thieme (U.) und Becker (F.), *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler*, Seemann, t. XI, 1915, p. 185.

Figure 1.

Van Dyck *St. Francis Xavier before a King of Japan* around 1641 Oil on canvas 192 × 137.5 cm. Pommersfelden Schloss Weissenstein der Graf von Schönborn, no. 165 (cat. p. 75, no. 50)

Figure 2.

Philippe Galle *St. Peter and St. John before the High Priest* 1558 After Maerten van Heemskerck 205 × 250 Amsterdam (cat. p. 231)

Figure 3.

Philippe Galle *St. Stephan before the High Priest* After Maerten van Heemskerck 212 × 275 cm. (cat. p. 232)

Figure 4

Philippe Galle *Achior before Holofernes* After Maerten van Heemskerck 205 × 246 cm (cat. p. 232)

Figure 5.

Cornelis Cort *Moses and Aaron Before Pharaoh* After Federico Zuccaro 407 × 272 cm (cat. p. 232)

Figure 6.

Nicolas Poussin *The Miracle of St. Francis Xavier* 1641 Oil on canvas 444 × 234 cm Musée du Louvre, Paris (no. 7289) (cat. p. 233)

Figure 7.

F. Mendes Pinto *Peregrinação* 1614 Cover sheet (cat. p. 233)

Figure 8.

F. Mendes Pinto *Les Voyages Aduantureux...* 1628 Cover sheet (cat. p. 233)

Figure 9.

Manuel Henriques *St. Francis Xavier. Preaching to a Daimyo of Japan*. (cat. p. 234)

Figure 10.

Artist Unknown *St. Francis Xavier received by the Daimyo of Bungo* Print (cat. p. 234)

Figure 11.

Pietro Fontana (1762-1837) *St. Francis Xavier and the Daimyo of Bungo* Print (cat. p. 234)

[川崎会場]

川崎市市民ミュージアム

1999年1月15日—3月14日

主催=川崎市市民ミュージアム/朝日新聞社/NHK横浜放送局/NHKプロモーション/ザビエル展実行委員会

[山口会場]

山口県立美術館

1999年4月6日—5月30日

主催=山口県立美術館/朝日新聞社/NHK山口放送局/NHKちゅうごくソフトウェア/ザビエル展実行委員会

[東京会場]

東武美術館

1999年6月10日—7月20日

主催=東武美術館/朝日新聞社/NHK/NHKプロモーション/ザビエル展実行委員会

[鹿児島会場]

鹿児島県歴史資料センター黎明館

1999年7月31日—8月29日

主催=鹿児島県歴史資料センター黎明館/朝日新聞社/NHK鹿児島放送局/NHK九州メディス/ザビエル展実行委員会

[岡崎会場]

岡崎市美術館

1999年9月11日—10月24日

主催=岡崎市/朝日新聞社/NHK名古屋放送局/NHK中部ブレイズ/ザビエル展実行委員会

[長崎会場]

長崎県立美術館

1999年11月12日—12月5日

主催=長崎県教育委員会/長崎県立美術館/朝日新聞社/NHK長崎放送局/NHK九州メディス/ザビエル展実行委員会

共催=ポルトガル文化省国際交流部/ポルトガル外務省

後援=ポルトガル大使館/スペイン大使館/インド大使館/ローマ法王庁大使館/ICOMアジア-パシフィック機構/外務省/文化庁

企画協力=上智大学

協賛=ネスレ日本

協力=日本航空/ヤマト運輸

[Kawasaki Venue]

Kawasaki City Museum

January 15-March 14, 1999

Organized by: Kawasaki City Museum; Asahi Shimbun; NHK (Japan Broadcasting Corporation) Yokohama Station; NHK Promotions Co., Ltd.; Executive Committee of Xavier Exhibition in Japan

[Yamaguchi Venue]

The Yamaguchi Prefectural Museum of Art

April 6-May 30, 1999

Organized by: The Yamaguchi Prefectural Museum of Art; Asahi Shimbun; NHK (Japan Broadcasting Corporation) Yamaguchi Station; NIKK Chugoku Software & Planning, Inc.; Executive Committee of Xavier Exhibition in Japan

[Tokyo Venue]

Tobu Museum of Art

June 10-July 20, 1999

Organized by: Tobu Museum of Art; Asahi Shimbun; NHK (Japan Broadcasting Corporation); NHK Promotions Co., Ltd.; Executive Committee of Xavier Exhibition in Japan

[Kagoshima Venue]

Kagoshima Prefectural Museum of Culture REIMEIKAN

July 31-August 29, 1999

Organized by: Kagoshima Prefectural Museum of Culture REIMEIKAN; Asahi Shimbun; NHK (Japan Broadcasting Corporation) Kagoshima Station; NHK Kyushu Medi's, Inc.; Executive Committee of Xavier Exhibition in Japan

[Okazaki Venue]

Okazaki City Museum

September 11-October 24, 1999

Organized by: Okazaki City; Asahi Shimbun; NHK (Japan Broadcasting Corporation) Nagoya Station; NHK Chubu Brains, Inc.; Executive Committee of Xavier Exhibition in Japan

[Nagasaki Venue]

Nagasaki Prefectural Art Museum

November 12-December 5, 1999

Organized by: Nagasaki Prefectural Board of Education; Nagasaki Prefectural Art Museum; Asahi Shimbun; NHK (Japan Broadcasting Corporation) Nagasaki Station; NHK Kyushu Medi's, Inc.; Executive Committee of Xavier Exhibition in Japan

Co-organized by: Office International Relations, Ministry of Culture, Ministry of Foreign Affairs, Government of Portugal

Supported by: Embassy of Portugal in Japan; Embassy of Spain in Japan; Embassy of India in Japan; Apostolic Nunciature; ICOM (International Council of Museums) Asia-Pacific Organization; The Ministry of Foreign Affairs, Japan; The Agency for Cultural Affairs, Japan

Cooperated for planning by: Sophia University, Tokyo

Cooperated by: Nestlé Japan Limited

With the assistance of: Japan Airlines; Yamato Transport Co., Ltd.

目次 Contents

9	はじめに—16世紀の壮大な異文化交流
14	第1章 ヨーロッパとの出会い
19	洋風画の源を探る—1
56	第2章 ザビエルとキリスト教の伝来
63	洋風画の源を探る—2
112	第3章 海を渡る交流
117	洋風画の源を探る—3
178	作品解説
212	ポルトガルと日本との出逢い(1543~1639年) ルイ・マヌエル・ロウレイロ
222	キリシタン布教における“適応”について 高瀬弘一郎
231	ヴァン・ダイク作、通称《日本の王に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル》について 木村三郎
237	スペインにおける聖フランシスコ・ザビエルの図像研究 フェルナンド・G・グティエレス神父
243	ポルトガルにおける聖フランシスコ・ザビエルの美術的図像表現 —企画・立案から実行への系譜— ヴィトル・セラン
250	聖遺物入れを見るための手引き コーネゴ・マヌエル・ロウレンソ
253	聖フランシスコ・ザビエルと日本 ジョアン・パウロ・オリヴェイラ・イ・コスタ
257	聖フランシスコ・ザビエルが見た16世紀のリスボン フェルナンド・カステロ・ブランコ
262	資料・参考文献 Materials and bibliography
271	日欧交渉史略年表

凡例

St. Francis (de) Xavier の姓の日本語表記には、古より「ザビエル」「サビエル」「シャビエル」「ハビエル」「グザヴィエ」など何通りかあるが、本展覧会では最も通用してきた「フランシスコ・ザビエル」に統一した。

アジアの地名の表記は、当時のポルトガル語をはじめとする欧文献の表音(例:シナ)に拠ったものがある。

本図録には作品図版とその解説を収録した。作品番号は図版の番号に共通するが、各会場の展示順とは必ずしも一致しない。

作品解説には原則として作品番号、作品名、制作者名あるいは流派名・美術様式、制作年あるいは刊行年、材質・技法・員数、寸法(単位はセンチメートル、原則として縦×横、または高さ×幅×奥行き)、所蔵者名を日英両語で示した。データが不明の場合は記載していない。

出品作品のデータ類および作品解説は、日本国内からの出品を除き、所蔵者から提供された資料の翻訳に基づいている。

作品解説の執筆者名は、日本側執筆者は姓を、国外執筆者は姓名のイニシャルを、解説末尾に付した。執筆者、翻訳者名は、別掲リスト参照。

図版各章の作品グループ解説は以下が分担して執筆した。
第1章=望月一樹(川崎市市民ミュージアム)
第2章=岸本美香子(東武美術館)
第3章=綿田 稔(山口県立美術館)

会場により出品されない作品がある。また作品保護のため、会期中、随時展示替えを行うため、本図録収録の作品が会場に陳列されていない場合がある。

COMISSÃO DE HONRA

Dr. Jaime Gama
Ministro dos Negócios Estrangeiros

Prof. Doutor Manuel Maria Carrilho
Ministro da Cultura

D. João Alves
Presidente da Conferência Episcopal Portuguesa

Dr. Rui Goulart de Ávila
Embaixador de Portugal em Tóquio

Dr.ª Patrícia Salvação Barreto
Directora do Gabinete de Relações Internacionais

COMISSARIADO

Prof. Doutora Maria Natália Correia Guedes
Comissária Geral

Dr.ª Ana Maria Brandão
Comissária Adjunta

COMISSARIADO TÉCNICO

Dr.ª Maria de Lurdes Simões de Carvalho
Subdirectora do Gabinete de Relações Internacionais

Arq. Eduardo Kol de Carvalho
Conselheiro Cultural da Embaixada de Portugal em Tóquio

COLABORADORES

Pe. António Lopes S.J.

Dr.ª Dália Maria Godinho Guerreiro

Dr. Lufs Montalvão

Dr.ª Maria Isabel Rocha Roque

Dr.ª Maria Carmina Correia Guedes

[監修]
坂本 満
聖徳大学教授

木村三郎
日本大学教授

[学術協力]
日埜博司
流通経済大学助教授

井溪 明
堺市博物館主査

[Adviser]
Prof. Umesh Pawankar
Sophia University

[実行委員長]
吉田和男
東武美術館長

[副委員長]
加藤有次
川崎市市民ミュージアム館長

上野孝明
山口県立美術館長

今吉 弘
鹿児島県歴史資料センター黎明館館長

芳賀 徹
岡崎市美術館長

平田徳男
長崎県立美術館館長

[委員]
白柳誠一
カトリック東京大司教

高祖敏明
上智大学教授

吉川利文
朝日新聞社文化企画部長

横里幸一
NHK放送事業局事業部長

岩井善弘
NHKプロモーション展博事業本部長

榎本 徹
山口県立美術館副館長

田中晴久
東武美術館副館長(兼ザビエル展実行委員会事務局長)

[事務局]
望月一樹
川崎市市民ミュージアム学芸員

綿田 稔
山口県立美術館学芸員

岸本美香子
東武美術館学芸員

高田裕美子
東武美術館学芸員

徳永和喜
鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸課学芸専門員

杉浦 健
岡崎市美術館学芸員

伊藤晴子
長崎県立美術館学芸員

園田二郎
朝日新聞社文化企画部次長

大倉美恵子
朝日新聞社文化企画部

旭 充
NHK放送事業局事業部副部長

赤崎達朗
NHK放送事業局事業部

高橋美奈子
NHKプロモーション展博事業本部

神野聖子
NHKプロモーション展博事業本部

Photo credits

Museo del Prado-Madrid-Derechos Reservados.

Photo Vatican Museums

Biblioteca Apostolica Vaticana

Courtesy Graf von Schönborn Kunstsammlungen,
Pommersfelden

The Walters Art Gallery, Baltimore

Barbara+Uli Zimmermann

桜井紳二

上野剛宏

吉田明弘

Nuno Fevereiro

Mário Soares

José Pessoa/Arquivo Nacional de Fotografia-
Instituto Português de Museus

Laura Castro Caldas/Paulo Cintra

José Manuel Palma/Instituto José de Figueiredo

Laura Guerreiro

来日450周年 大ザビエル展 図録

[デザイン]

大石一義

[制作]

美術出版デザインセンター

[編集・発行]

東武美術館/朝日新聞社

©1999

Catalogue: St. Francis Xavier—His Life and Times

[Designed by]

Oishi Kazuyoshi

[Produced by]

Bijutsu Shuppan Design Center

[Edited and published by]

Tobu Museum of Art; Asahi Shimbun

©1999